

北海道恵庭市柏地区 生涯学習施設計画

The Project of Kashiwa Community Center in Eniwa City, Hokkaido

正会員 ○渡部 典大 *1
正会員 小倉 寛征 *3
正会員 坂本 昌士 *5
正会員 前田 孝輔 *7

正会員 瀬戸口 剛 *2
正会員 尾門 あいり *4
正会員 中島 望 *6

○ WATANABE Norihiro*1
OGURA Hiroyuki*3
SAKAMOTO Masashi*5
MAEDA Kosuke*7

SETOGUCHI Tsuyoshi*2
OKADO Airi*4
NAKASHIMA Nozomi*6

- *1 北海道大学大学院工学院 博士課程 工修
- *2 北海道大学大学院工学研究院 教授 博士（工学）
- *3 エスエーデザインオフィス
- *4 積水ハウス株式会社 工修
- *5 北海道庁建設部 工修
- *6 国土交通省 工修
- *7 三菱地所設計 工修

- *1 Doctoral course, Graduate School of Eng., Hokkaido Univ.
- *2 Prof. Graduate School of Eng., Hokkaido Univ., Dr.Eng.
- *3 Sa design office
- *4 SEKISUIHOUSE, Ltd, M.Eng.
- *5 Hokkaido Government Construction Department, M.Eng.
- *6 Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism, M.Eng.
- *7 Mitsubishi Jisho Sekkei, inc., M.Eng.

1. 計画概要

住宅地におけるコミュニティセンターの計画。地域の子どもの学びの場となる施設をつくるのが強く望まれており、特に本計画では次のような機能が求められた。

【①交流機能】地域の住民や市民の居場所をつくる。【②学習機能】図書を通じて、地域住民が次世代の子どもたちを育む場。恵庭市の伝統を受け継ぎ、地域の歴史を伝承する場。柏地区に残された貴重な自然を受け継ぐ。【③運動機能】地域の住民や子どもたちが、武道や軽スポーツができる場。

敷地は北海道恵庭市柏地区。低層の住宅に囲まれた緑豊かな土地において、地域で子どもを育てる「地育」をコンセプトに、地域のコミュニティ施設を計画した。

2. 計画理念と建築計画の考え方（図1）

自立的融和

本計画は、地域の子どもたちを育む施設として、運動、大人数が集まるレクチャー、個人での学習や読書など、複数の異なる活動の場として「自立」した居室が求められる一方、地域のコミュニティ施設として、利用者がつながりを感じられる、地域全体で子どもたちを育てることを意識させる「一体感」が求められた。これら相反する2つの要素を実現するために、以下の4つの手法を用いて建築を構成した。

1) 本の回廊（図1-C）

長さ約100mの本棚が連続する「本の回廊」を本施設の中心として計画した。本の回廊は、各居室と一体的に利用できるようデザインし、気軽に使用しやすいよう計画している。地区住民が、積極的に書籍や棚に飾りたいものを持ち寄り、自ら運営を行うものである。

2) 斜めの軸（図1-A）

本計画は敷地が細長く、複数の異なる機能の居室が横に並ぶことになる。地域住民同士や世代間の交流を促すために、居室同士がゆるやかにつながり、ひとつの居室で活動が完結することなく、動きのある空間となるよう、斜めの軸線で建築空間を構成した。斜めの軸は、敷地の持つポテンシャルとして、歴史文化・方位・景色の要素から設定した。

また、斜めの軸で構成されたボリュームのズレは、溜まりのスペースを生み出し、オープンでありながら落ち着く場を形成している。

3) 建築ボリュームの分節（図1-B）

計画敷地は、低層の住宅地のなかにある。

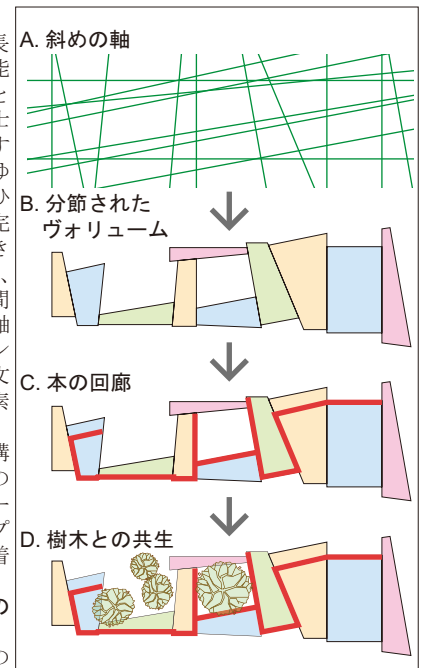


図1 建築計画の考え方

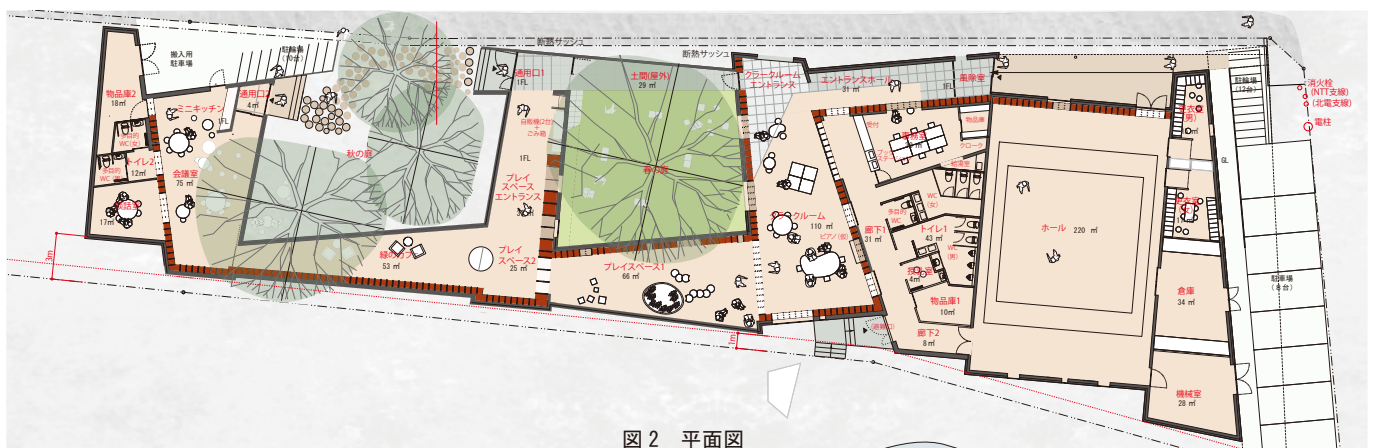


図2 平面図



図3 正面外観

所在地：北海道恵庭市大町
 主な用途：地域交流センター
 敷地面積：1,988m²
 建築面積：1,017m²
 延床面積：912m²

Location : Omachi ,Eniwa-shi,Hokkaido
 Main Use : Regional community center
 Site Area : 1,988m²
 Building Floor Area :1,017m²
 Total Floor Area : 912m²
 Keywords : Lifelong Learning Centre, Community Centre,
 Wooden Public Architecture

周囲の街並みに馴染み、親しみやすい施設となるよう、また各居室機能の独立性を担保するよう、建築を居室ごとに分節し、配置した(図4)。

4) 既存樹木との共生 (図1-D)

計画敷地は、元々多くの樹木が植えられた個人宅の庭の一部であり、計画地周辺も緑豊かな地域である。敷地内の貴重な樹木4本をそのまま残して活用する計画とし、樹木の根を避けながら、囲うように配置することで、既存の樹木を本施設に一体感を与えるシンボルツリーとして利用した(図5)。

3. 本の回廊を中心とした建築デザイン

1) 本棚グリッドによる建築デザイン

本計画の中心である本の回廊を構成する本棚の寸法を400mm×400mmとし、その寸法をグリッド単位として、天井高さ、開口、建物高さ、造作家具などの建築構成要素を設計し、統一されたデザインとした。

2) 本棚と馴染む開口デザイン (図7)

開口は、本棚と馴染むよう全て正方形で構成した。建築に期待される多様な機能から、開口部の持つ意味を①光②風③景色・活動④天体・方位⑤アクセントの5要素に整理し、それらに合せて開口の大きさと位置を決定した。

3) 本棚を活かす家具デザイン (図8)

建物全体にめぐる本棚を利用し、各居室の機能によって求められる家具(机、椅子、収納、遊具等)を設計した。統一された本棚でありながら、異なる居室機能に呼応してつくられた家具が、空間に多様性を生み出し、アクティビティの広がりを促すようデザインした。

4. 総括

現在の地域コミュニティでは、従来型の形式ばった地域活動等は外から入りづらく、嫌煙されがちであるが、一方で日常的な人と人とのつながりは希薄になり、孤立感が高まっている。そのような状況では、気軽な立ち寄り、偶発的な出会い、何となく感じられる他者の動きといった、人と人が自然に繋がりを感じられる、地域コミュニティのゆるやかなりが求められている。

本計画では、地域のコミュニティーセンターとして、小さな乳幼児から高齢者、小中高校生など、様々な異なる世代、異なる嗜好を持った地域の人たちの利用が想定されていた。斜めの軸によって構成された建築ヴォリュームは、異なる立場の利用者や個人々のスペースを大切にしながらも、直角の箱のように、その中で完結することなく、利用に動きを生み出す。連続する本棚は、その動きに流れをつくることで、利用者同士を自然とつなげてくれる。本計画は、施設の利用を通して、地域のコミュニティがゆるやかに融和していくことを計画している。



図4 街並みに合せて分割されたヴォリューム

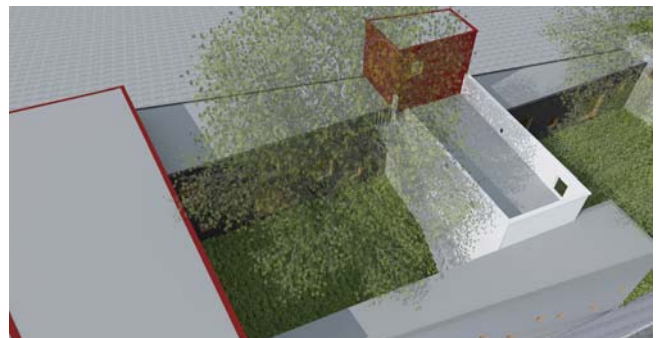


図5 既存の樹木を活かした中庭



図6 ゆるやかにつながる居室と連続する本棚

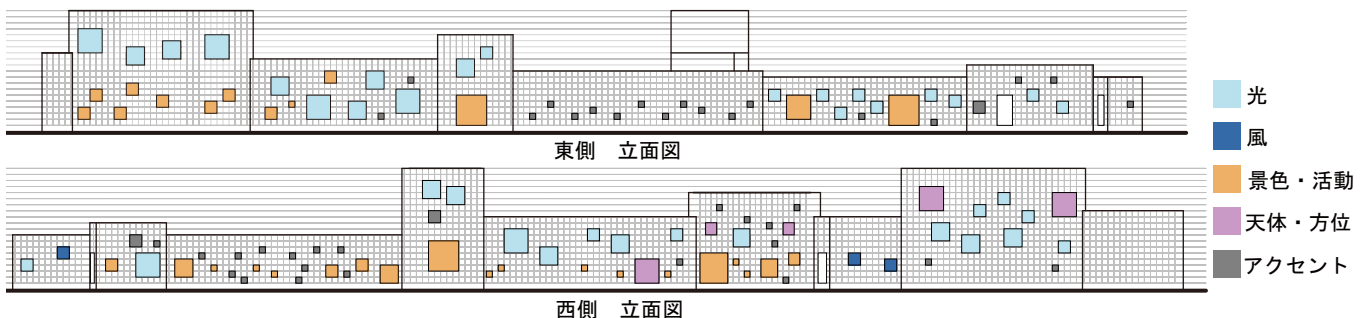


図7 開口デザイン

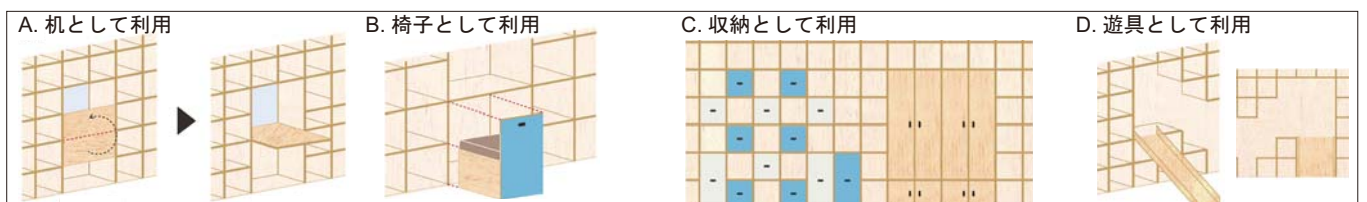


図8 本棚を活かす家具デザイン